

贊』からの引用として贊を載せる。この贊は『利益記』に載せる贊と同文で、増上寺大僧正になってからの在禪のもの（文化五年）である。また、悦峰道章禪師の『書』を載せているが、これは「祐天大僧正行状記」（以下「行状記」）なる書物に出ているものと同文である。残念ながらこの『行状記』の著作成立年代は不明である。

また、明治三十九年に吉川弘文館から刊行された『続日本高僧傳』第十にも「江戸増上寺沙門祐天傳」を載せる。これは『泉谷集』を参考とし簡略化された伝記であることが記載されている。すでに講談本など広く普及した明治時代にも、僧侶の立場（著者は釋道契）から書かれたものが存在していたことがわかる。

また、全く別の系統として『磐城志料』（明治四十四年）中に郷土の名僧として袋中と並び「僧祐天」の項がある。この中には主として最勝院中興のことを載せている。

●第三節 広く普及した伝記の系譜

祐天の名を天下に広めたのは先の浄土宗系の伝記ではなく、ここで「普及本」と呼ぶものによることは疑いない。在世中とはかく現代まで祐天が高僧として話題になるのは、文芸として世に広まったからにほかならない。ここでは、完全とは言えないが年代順にどのような書物が書写あるいは開版されたかを追ってみたい。

伝記ではないが、最初に祐天の事績を物語としてまとめ開版されたのが、祐天在世中に刊行された『聞書』である。これはのちに『江戸名所図絵』にも取り上げられていることから、相当なベストセラーとして読まれていたことは疑いない。

世に知る所の累が怨霊解脱の誉は尤も著し。「割注」此事は、師の歳三十六、其頃檀導師に従ひ、北総飯沼に在住し給へる時の現益なり。怨霊解脱物語といへる艸子に詳なり。

『聞書』は初版が元禄三年であり、祐天隱遁中に開版されていることが注目される。すなわち、まだ無名の隱遁僧の物語として累の怨霊解脱の物語が語られたのであった。そして、正徳二年祐天が大僧正に登り詰めるとき、再版されていることがまた注目される。この本そのものは国文学者あるいは関山和夫先生によって詳細に検討されているのでここでは触れないが、あとに続く講談や歌舞伎の原型になっていることは疑いの余地がない。

最初に、祐天の伝記として広く世に出されたのは『御伝記』ではなかるうか。この版本はなく、すべて書写本であるが今なお多数現存しているのである。少し調べただけでも大正大学図書館にコピーがあるのをはじめ、成田仏教図書館、いわき中央図書館や祐天寺、最勝院をはじめ、いわき市在住の郷土史家の間にも数冊現存することが確認されている。このうち、

〔江戸名所図絵〕卷二『日本名所図絵全集』昭和五十年覆刻、七〇七頁

祐天寺所蔵本等一部には

宝暦十三癸未年六月十四日より七月七日までの間麻布三谷山正善寺全道和尚説法

日毎より夕座に至て祐天大和尚の御縁起をとき玉ふ（後略）

という序がある。宝暦十三年は祐海没後三年目にあたる。また、麻布三谷山正善寺とは『江戸砂子温故名跡誌』五（二三三頁）によると、三谷町の妙祐山正善寺という寺がかつて存在していたことが知られるのでおそらくこの寺と思われるが、天台宗の寺院と記されている。

この序によると全道和尚なる僧が説法したものの聞書であることがわかるが、天台の僧である可能性があること、あるいは善導をもじっているとも解されることから真偽ははっきりしない。

内容的にもこの『御伝記』には、「浄土本」系の伝記には出てこないさまざまな話が出てくる。例えば、祐天の幼名を三之助と言うこと、増上寺に入寺したあとも愚鈍で成田不動の利剣によって智慧を得たこと、檀越上人に勘当されていたこと、さらには隨身時代の事績に関する事などである。「浄土本」とは逆に檀林主になったあとのことは語られていない。言ってみれば、「浄土本」と『御伝記』は相補的な内容となっているのである。特に成田山を伝記に取り入れた初出ではないかと考えられ興味深い。

版本として祐天上人を近世の超人的名僧に仕立て上げたのが『二代記』であろう。この本の発刊は、序に「聖朝癸亥の秋七月」とあることから享和三年であることが知られる。この年は恵頓による『開山行状』が刊行された翌年である。

『一代記』はのちに『佛教各宗高僧實傳』に活字となって収録されている。著者は一相無切有居士なる者で、内容は完全に小説化された読み物となっている。このことは、祐天の出身地を新妻村とし、誕生日を寛永十九年正月元旦としていることから知られるであろう。ここでも、祐天と成田山の深い関係が強調され、母親が成田不動にお詣りしたために祐天が生まれたとされている。しかし、生まれたときは「将来希有の大導師たる」と言われた上人も、妖術によって愚鈍の身となり、再び成田不動によって救われるというストーリーが展開されているのである。

この『一代記』には同版異本が存在していることが、菊地康雄氏によって明らかにされている（『祐天上人の伝記について』『四倉史学会会報』九、昭和四十五年）。すなわち、享和四年一月に刊行された『祐天上人御一代記図絵』（以下『図絵』）である。『図絵』のほうが多少大判で末尾に「拾遺後編六冊」の出版予告があるということである。

『一代記』が刊行された二十年后、文政六年に四代目鶴屋南北によって『法懸松成田利剣』として上演され、庶民の間で祐天と成田山の関係が決定的に位置付けられるようになるのである。この辺りの事情については関山和夫先生の論文『死霊解脱物語聞書』の研究（前出）

に詳しいので参考にさせていただくと、その二番目の序幕が『色彩間刈豆』である。これは本年（平成五年）の納涼歌舞伎でも富十郎と勘九郎によって演じられた人気歌舞伎である。関山先生によれば、文政六年より前、文化六年頃より累狂言は南北によって作られていたようである。古くは享保二十年より累狂言はあったと言う。

『一代記』ののち、曲亭馬琴『新累解脱物語』が文化四年に読み物として、怪談噺として圓朝の『真景累ヶ淵』などが出て、より文学的なもの、文芸的なものへと発展を遂げていった。

近代においては、明治三十二年の真龍齋貞水の『成田山利生記祐天の伝』あるいは『怪談累物語』を菊池氏や関山先生は指摘している。さらに、昭和三年に刊行された『講談全集』第二卷（大日本雄辨會講談社）には、桃川桂玉による「祐天上人」が収録されており、確実に昭和初期まで親しまれていたことがわかる。

祐天と成田山の関係を不信に思い、書かれた本もある。田村周助の『祐天上人実伝附録「天慶の乱」』（昭和九年）がそれである。この本のパンフレット（成田図書館蔵）によると、「祐天上人の断食祈請した不動尊は、上州館林善導寺の不動尊が真正である」としている。

しかしながら、これらの「普及本」に語られる祐天像は浄土宗の大僧正として将軍と法門をした実像を明らかにしているとは言えない。時代が下るに従って、成田山で断食修行をして智慧を得たという話や累済度の物語のみが強調されるようになっていったのである。

以上、祐天伝のすべてではないが、その流れを概観してきた。それでは、どれが祐天の史実としての実像なのであろうか。当然疑問の湧くところである。また、これらの伝記が世間に与えた影響はどのようなものであったのだろうか。ただの娯楽として終わってしまったのであろうか。本論でそこまで明らかにすることは不可能であろう。しかしながら、できる範囲で史実を明らかにし、あるいは浄土宗的立場の伝記から僧侶としての祐天の思想などを探ることから始めてみたい。

次に、祐天上人の生涯を主として「浄土本」による諸伝記、なかでも『略記』を底本とし、『増上寺資料集』などの裏付けとなる資料を挙げながら検討していきたい。

第二章

● 顕誉祐天の生涯と行蹟

● 第一節 誕生といわきの信仰

祐天は寛永十四年（一六三七）四月八日に奥州磐城郡に生まれたことが諸伝記によって明らかである。新妻家の菩提寺である最勝院（浄土宗、現いわき市四倉町上仁井田）の位置が